

ASSOCIAÇÃO CENTRAL NIPO-BRASILEIRA NOTÍCIAS E INFORMAÇÕES

ブラジル特報



あの町この町
プラナルティーナ Planaltina

特集 アマゾン経済の一断面 ～マナウス自由貿易区とSDGs農業～

- ・膨張するマナウス自由貿易区の変遷
- ・アマゾンのSDGs農業開発 パラー州の事例



一般社団法人 日本ブラジル中央協会

URL <http://nipo-brasil.org/> E-mail info@nipo-brasil.org

〒105-0004 東京都港区新橋 1-18-2 明宏ビル本館 5 階 TEL:03-3504-3866 FAX:03-3597-8008 発行人：大前孝雄／編集人：岸和田仁

新規会員募集中！

詳しくは協会へお問合せください。

鉄とともに、人とともに。 私たちのSDGs

ふとまわりを見れば、社会は鉄でできたものにあふれています。様々なものづくりで暮らしを便利に快適にしたり、災害に備えインフラをより強く安全に変えたり、豊富な資源と高いリサイクル性で環境負荷を軽減したり…鉄はこれからも、人と地球の未来をささえる無くてはならない素材です。だからこそ、日本製鉄は鉄を進化させ続け、皆さまと力を合わせて持続可能な社会づくりに取り組んでいきたい。私たちのSDGsに、終わりはありません。

目次

あの日この町 プラナルティーナ【小林大祐】	3
ブラジル・ナウ アマゾンの干ばつと南部の洪水 経済や農業への影響は？ 【『ブラジル特報』編集部】	5
【特集】アマゾン経済の一断面 ～マナウス自由貿易区と SDGs 農業～ 膨張するマナウス自由貿易区の変遷 【『ブラジル特報』編集部】	6
【特集】アマゾン経済の一断面 ～マナウス自由貿易区と SDGs 農業～ アマゾンの SDGs 農業開発 パラー州の事例 【『ブラジル特報』編集部】	8
アマゾンに根差す研究開発機関 INPA 【『ブラジル特報』編集部】	10
植物由来代替魚肉製品の展開 【『ブラジル特報』編集部】	11
ブラジル現地報告 演劇界の革命児ゼ・セルソを偲ぶ 【小林大祐】	12
連載・日系企業シリーズ 南米最大のアニメイベント「Anime Friends」に出演して 【川満ステイプ証】	13
連載・ビジネス法務の肝 電子署名【柏 健吾】	14
連載・勤どころ～税務&ホットトピック～ ブラジル移転価格制度の動向、及び企業が取り組むべきこと 転価格制度改正とガイドラインの公表を受けて 【エドソン・コスタ/三上智大/天野義仁】	15
エッセイ 『私とは』【江口シアナ宏子】	16
『ベルリンプスと秘密の森』監督来日 【服部章子】	17
ジャーナリストの旅路 ポルトガル語に「一苦勞」【田中健吾】	17
連載・文化評論 アレ・アブレウ監督のアニメ最新作『ベルリンプスと秘密の森』 【岸和田仁】	18
新刊書紹介	19
連載・ブラジルあれこれ ブラジルの気候あれこれ： リオ(亜熱帯)vs. ペレン(熱帯)	19



写真＝永武ひかる
「表紙のひとこと」

「アマゾン川河口北側、赤道直下アマバ州、州都マカバ近郊の朝日。流域では大木が伐採し尽くされていたが、植林やアグロフォレストリーの取り組みも。マラジョー島を挟んだ河口南側パラ州、州都ペレンでは、2025年にCOP30が開かれる」

永武ひかる：ブラジル撮影約30年、著作に写真絵本「世界のともだち3 ブラジル」（偕成社）等。www.hikarunphoto.com

プラナルティーナ Planaltina

夜明けの谷（Vale do amanhecer）そう呼ばれる教団の施設がブラジリアの衛星都市プラナルティーナの閑静な住宅街に広がる。ブラジルで最も急成長した宗教の一つで、国内外に600の支部、信者数は800万人を数えるという。

何も知らない人はそこをテーマパークと思うはずだ。星形の池、ピラミッド、黄、赤、緑の色鮮やかな建



造物が並ぶ。しかしすぐにただならぬ空気に支配されているのを直感で察する。興味本位で近づいていいものかどうか。

ハロウィンの時期じゃないのに、カラフルなマントやベールをまとった一群とすれ違う。シンボルのジャガーが掘られたマザー・テンプレの闇の中に踏み入ると、無事にここから出ることはできるだろうか？ と背筋がゾクゾクする。

深入りは避けるが、キリスト教、ヒンドウ教、ユダヤ教、インカ、古代エジプトなど、多様な宗教と文明から引き出された幅広い信仰に基づく。設立は1959年。ブラジリア建設と時を同一にするのは偶然ではない。

新首都建設に伴って国内各地から集った移住者は新しいアイデンティティやメカニズム、空間を求めた。また、超組織化されたコンクリート都市はディストピアな側面もあり、それを癒すかのように、DF（ブラジリア連邦区）では「夜明けの谷」の他にもInri Cristo、Templo da Boa Vontade (TBV) 等の新興宗教が誕生している。

もともとはバンデイランテスの宿場町であった古い歴史を持つプラナルティーナにはもうひとつの顔がある。それはブラジリアの礎石が置かれていることだ。市の中心から10kmほど離れた1,033mの丘の上に位置する。1922年の独立100周年の節目に据えられた。

礎石のオベリスクの高さは3.5m。とても小さい。ただ、ブラジルはどこから来て、どこへ行くのか？ などと思いをはせる場所としてはなかなかの立地だ。中央高原に将来の首都を建設する調査のため、1892年に訪れたMissão Cruis（クルルス調査団）の報告書にはこう記されている。

「気候は完全に規則正しく、一定の風が吹き、気温は常に一定である（中略）結論として、そこにあるすべてのものが、人間の存在を絶対的に容易にするために集まっていると私は信じている」



小林大祐（『ブラジル特報』編集委員）

広島から Tudo Bem?

映画『ファミリア』広島国際映画祭で 移民やデカセギの歴史など解説

ブラジル人コミュニティーを背景にした映画『ファミリア』（2022年、監督・成島出）が昨年11月にあった広島国際映画祭（<http://hiff.jp>）で上映されました。

陶器職人の神谷誠治（役所広司）は妻を早くに亡くし、山里で独り暮らし。アルジェリアに赴任中の一人息子の学（吉沢亮）が、難民出身のナディアと結婚し、彼女を連れて一時帰国した。結婚を機に会社を辞め、焼き物を継ぐと宣言した学に反対する誠治。一方、隣町の団地に住む日ブラジル人青年のマルコスは半グレに追われたときに助けてくれた誠治に亡き父の面影を重ね、焼き物の仕事に興味を持つ。そんなある日、アルジェリアに戻った学とナディアを悲劇が襲い…（公式サイトから）。

ブラジルに長く住んだ経験のある堀江剛史・当会理事が上映後、映画の背景となっている移民の歴史や在日ブラジル日系人、デカセギ子弟の課題に加え、ブラジル人定住者の多い島根県出雲市のケースなど例に挙げて解説を行い、来場者からは盛んに質問も上がっていました。

親に連れられ2歳で来日した古賀アンドレアさんは「セリフにあった『ブラジル人にも日本人にもなれない』って言葉は私も感じていた。移民100周年で盛り上がっていた2008年のリーマンショックで回りの知り合いが派遣切りになり複雑な気持ちだった」と、映画のストーリーに自分の体験を重ねた。集住地区や非行に走るデカセギ子弟たちがでてくることから「その背景がわからないと一般の人には理解しにくい部分があったのでは。日伯協会の解説があつてよかったと思う」と話していた。



▲上映後、移民やデカセギ子弟について解説する堀江理事（右）と、広島国際映画祭スタッフの小松正幸氏



広島日伯協会

ブラジルと広島の交流を推進するため1969年に創立。在広島ブラジル人との多文化共生社会を支援し、ブラジル広島文化センター（県人会）と県、市ほか関係市町村と連携を取りながら活動している。法人会員75、個人会員80。田中秀和会長（6代目、2020—）は、在広島ブラジル連邦共和国名誉領事。

Hiroshima Bossa Open Cafe 3回目、ブラジルとの縁感じて



▲河岸のステージではカポエイラやボサノヴァも披露された

今年3回目となる『Hiroshima Bossa Open Cafe』（主催：RiverDo! 基町川辺コンソーシアム）が昨年11月に開催されました。

多くの広島移民が栽培に携わったコーヒーと、カフェで流れる音楽を切り口に原爆ドーム近くの河岸で行われる平和イベントとなっています。

ステージ上では、ボサノバ、サンバ、ショーロ、カポエイラなどのブラジル音楽やダンスが披露され多くの拍手が送られました。ブラジルのドリンクや軽食、シュラスコ、コーヒーなども来場者の舌を楽しませ、ブラジル雑貨も販売されていました。広島日伯協会は同イベントに初回から協力しており、「ブラジルをテーマにした広島唯一のイベント。これからも支援していきたい」としています。イベントの詳細はサイト（<http://hiroshimabossa.com>）まで。



アマゾンの干ばつと南部の洪水 ～経済や農業への影響は？～

大渇水がパナマ運河を直撃

日本のメディアでも大きく報道されているように、エルニーニョ現象の影響による渇水・降雨量大幅減少でパナマ運河の船舶通過に必要な水の供給を行っている主要水源ガトゥン湖の水位が下がり、運河を通航する船舶の数を制限している。通常では毎日36隻の通航数であったが、11月には31隻と2割ほど減少している。同地方の乾期は12月から4月頃までなので、2月にはこの通航隻数を18隻までと半減せざるを得なくなる。同運河の入口付近には、順番待ちの船舶が溜まっており、ウエイティング時間は11月初めの段階で、2週間以上となっているが、今後この渋滞状況は一層悪化しそうである。

パナマ運河をあきらめて、南米最南端や南アフリカ経由で迂回すれば、時間もコストも大幅にアップすることとなり、世界の海運物流に多大なインパクトを与えている。

ペルー氷河の溶解問題

ペルーのアンデス山脈には、世界の熱帯地域にある氷河群の68%が集中しているが、地球温暖化の影響でこの氷河のかなりの部分が融けてしまい大きな問題となっている。

本件を報じた英字新聞 The Japan News の11月29日付け記事（ロイター通信）を読んでみよう。ペルーの「国立氷河エコシステム調査研究所」による最新レポートによれば、過去60年間でペルー国内にある熱帯氷河の56%が失われてしまい、その氷河融け水が山の中に大きなラグーン（湖）を生み出している。この湖水が決壊して洪水を引き起こすリスクが高まっている。

同研究所によれば、1962年には氷河（氷＋雪）の表面積が2,399km²だったのが、2020年には1,050km²まで減少してしまった。一方、氷河が融けて生まれたラグーンの数も現在8,466で、その湖面の表面積の総計は1,081km²となっている。2千万人ものペルー住民の生活がこの雪解け水に直接的に依存しており、このペースで氷河が融け続ければ、あと数十年もしないうちに氷河がなくなってしまうかもしれない。

アマゾンにおける渇水

エルニーニョが引き起こす干ばつは、パナマと同様にアマゾンをも直撃している。10月16日の、アマゾン支流のネグロ河の水位は13.59mと過去100年間で最悪のレベルまで下がり、生活用品の物流を担う船舶が運航できなくなって、生活物資が不足、学校にも通えず学校閉鎖となった。水温上昇や水中酸素不足が原因で魚も淡水イルカも大量に死んでしまった。さらには、

マナウス市に隣接する森林地帯は雨不足で乾燥化、山火事が頻発、その煙がスモッグとなってマナウス市全体を覆う事態になった。原料や製品の物流も不可能となってZFM（マナウス自由貿易区）の工場も稼働できない状態に陥ってしまった。アクレ州の州都リオブランコでは水道の断水が続き、生活用水を給水車に頼る家族数が4千以上となり、ロンドニア州ではマデイラ河の水位低下でサントアントニオ水力発電所が一時稼働停止となってしまった。干ばつのため、自給作物主体の農業はほぼ全滅となり、漁師は漁獲出来ずアマゾン地域の漁業も壊滅的な影響を受けている。

南部における大洪水

9月から10月にかけて集中豪雨がリオグランデ・ド・スール州とサンタカタリーナ州を襲い、タクアリ川やイタジャイアスー川が氾濫し、少なくとも47名がなくなった。同地域の工場は操業不能となり、川沿いの農地は壊滅状態、こちらも過去100年間で最悪の水害となってしまった。

穀物生産高予想はまだ楽観的

昨年（2022/2023年度）のブラジルにおける穀物収穫高は322.8百万トンと史上最高であったが、今年の予想値はどうなっているだろうか。天候異常という減産ファクターをどの程度織り込んでいるのだろうか。

CONAB（国家食料配給公社）の最新発表（11月9日付け）では、2023/2024年度の穀物類収穫予想は316.7百万トンとなっており、これは1か月前の10月14日付けの発表数字、317.5百万トンよりも、わずか80万トンの下方修正にすぎない。トウモロコシの予想値を30万トン下げたものの、大豆の予想値162.4百万トンやコメの予想値10.8百万トンは全く下げていない。すなわち、天候異常による減産可能性を全くといっていいほど見込んでいない。

TV農業番組（Globo RuralやRecord News Ruralなど）では毎回のよう、ゴイアス州やマトグロッソ州における大豆の植付が高温と降雨不足で大幅に遅れている、とか、既に植付を行った農地の土壌水分不足で大豆の種子が発芽せず、種まきをやり直すか、綿作に切り替える、とかの実態が繰り返し報道されている。

こうした異常気候の影響を勘案するならば、数値的には、1千万トン単位での下方修正予想値が今後出てくるのではないかと懸念される。

（『ブラジル特報』編集部）



●特集●アマゾン経済の一断面 ～マナウス自由貿易区とSDGs農業～

膨張するマナウス 自由貿易区の変遷

『ブラジル特報』編集部

熱帯雨林に囲まれ、貨物輸送を水路に頼るブラジル北西部最大の都市マナウス(アマゾナス州州都)では人口の膨張が続いている。都市を支える経済基盤は「マナウス・フリーゾーン(ZFM=自由貿易区)」である。製造業の誘致を狙った税制優遇地区であり、1967年発足と半世紀以上の歴史を誇る。日本企業も1970年代前半から生産を開始するなど長くかわってきたが、近年は電気・電子を中心に存在感が低下している。その一方で影響力を強めているのが韓国・中国などのアジア勢である。

人口増を支える ZFM 生産の大半は内需向け

新型コロナウイルス流行で2年間延期された国勢調査が2022年に実施され、ブラジル各自治体の人口動態が明らかになっている。ほぼ10年ごとの調査のたびにブラジル全体の人口増加率は低下していたが、今回は前回2010年と比べて6.5%増とついに一ケタ台になり、人口上位10都市のうち2010年比で減少したところが半数に達した(表参照)。これに対し、第7位のマナウスは14.5%増の206.4万人となり、大豆生産で成長する中西部の主要都市とともにニケタ台を維持した。図1が示すように伸びは鈍ったが、1991年比で2倍強、1970年比で6.5倍強である。人口増を経済面で支えるのがZFMである。ZFM内のマナウス工業団地(PIM)での直接雇用は2022～2023年の平均で11万人程度、間接雇用を含めると雇用規模は50万人ともいわれる。彼らの生活維持に必要なサービス業も含め、「経済は事実上、工業団地の一本足打法」(在マナウス総領事館の荻野正裕総領事)とPIMの存在感の大きさが指摘されている。

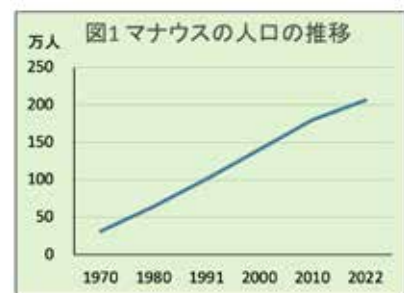
ブラジルの人口上位10都市		
	2022年人口	対2010年比
1 サンパウロ	11,451,245	1.8
2 リオデジャネイロ	6,211,423	-1.7
3 ブラジリア	2,817,068	9.6
4 フォルタレーザ	2,428,678	-1.0
5 サルバドール	2,418,005	-9.6
6 ペロオリゾンテ	2,315,560	-2.5
7 マナウス	2,063,547	14.5
8 クリチバ	1,773,733	1.2
9 レシフェ	1,488,920	-3.2
10 ゴイアニア	1,437,237	10.4

出所: IBGE (Censo Demográfico)

マナウス全域がZFMの対象だが、メーカーの多くはPIMに工場を置く。PIMの企業数は2023年7月時点で500社程度である。工場規模や売上高の大きい企業は外資系が多いが、国内資本の企業も数多い。税制優遇を受けられる地区としてはメキシコのマキラドール、中国の経済特区などが歴史上知られるが、ZFMはそれらの地区とは性格が異なる。マキラドールなどが輸出を促す制度なのに対し、ZFMは内需が主役である。実際、PIMの輸出比率は2%程度にすぎない。

水運頼みの物流コスト 税の軽減措置でカバー

マナウス経済圏では物流コストが最大の障害になっている。生産に必要な原材料、設備を陸の孤島といわれるアマゾン内陸部までわざわざ運んで生産し、出来上がった製品を大消費地である南東部などに運び出すのはいかにも効率が悪い。そのハンディを解消するための措置がブラジルコストの代表的存在である税金の軽減・免除である。「税の優遇により物流コストは十分まかなえる」(PIM進出企業幹部)という。ブラジルコストを逆手に取った産業振興策といえる。内需依存構造のため、在マナウスの製造業の売上高はブラジル経済の動向と直結する(図2参照)。ブラジル経済は2000年代半ばからの資源価格高騰で潤い、世界金融危機の影響を受けた2009年ごろを除けば、2010年代前半までは好調だったが、2010年代半ばに政治や経済の混乱により景気が落ち込んだ。その後は新型コロナが広がった2020年を例外とすれば、回復傾向にある。マナウス工業団地の企業の売上高はまさにブラジルの内需を反映して揺れ動いている。



とはいえ、2000年代前半までと比べれば、足元の売上高の水準は高い。工業団地で雇用される労働者数や進出した企業数も売上高を反映して増減しているが、長期的にみると、増加傾向にある(図3参照)。アマゾナス州内だけでは人材が足りないため、「ブラジル全域から働き手を採用している」(進出企業社長)という。

PIMの売上高の内訳(2022年)を製品別にみると、情報機器28.7%、電気・電子18.5%、二輪14.7%、化学10.2%の順である。これら4品目で7割強を占める。

ホンダの垂直型生産とサムスンの身軽な体制

このなかで日系企業が圧倒的に強いのが二輪である。マナウス自由貿易区監督庁(SUFRAMA)は垂直型産業クラスターを構築した模範例として、ホンダの生産体制を挙げる(貿易・国際問題担当のアルトゥール・リスボア氏)。同社は1976年にマナウスで生産を始め、現在は日系の堅固な協力会社グループを形成する。2023年8月時点でブラジル国内110社(うちマナウス32社)から部品を調達し、8000人を雇い、ブラジル国内のシェアは7割以上を誇る。同じくマナウスで製造するヤマハのシェア2割弱を大きく引き離す。

一方、PIM総売上高のほぼ半分を占める情報機器、電気・電子の両部門で大きな存在感を示すのが韓国・サムスン電子である。AV機器、情報機器、白物家電など多様な商品を製造する。現地法人別のデータが公開されていないため、正確には把握できないが、ホンダとともにZFM最大級の企業とみられている。

サムスンの特徴はマナウスのほか、サンパウロ州カンピーナスにも工場をもち、2拠点体制で生産している点にある。ホンダのような垂直型クラスターを形成していないため、生産ラインを2つの工場間で動かすだけで比較的容易に生産地を変更できる身軽さがある。

情報機器や電気・電子産業は各州が誘致を競っている。「マナウスで四輪を生産しない代わりに、二輪はマナウスで独占する」という政府主導のすみ分けができている二輪・四

輪業界とは状況が異なる。情報分野は連邦法で全国的な税制優遇措置が設定されているうえ、州税である商品流通サービス税(ICMS)は各州の判断で変更できる。このため、税制優遇措置

や競争環境、物流コストなどを総合判断して、メーカーは生産地を臨機応変に変えることがあり、実際、サムスは携帯電話の生産を両拠点間で移動させたことがある。マナウスに大規模工場をもつ韓国・LG電子が2021年に全世界で携帯電話生産から撤退した際は、サンパウロ州の工場を閉鎖し、ディスプレイやパソコンの生産をマナウス工場に移転した。

垂直型クラスターを形成したホンダにはこのような身軽さはないが、別の意味で競争上の優位性がある。協力会社との連携により製品の品質を確保し安定的に生産できる利点に加え、税制面での競争条件も有利に働く。税の恩恵を受けるには製品ごとに決められた基本製造工程(PPB)という基準を満たす必要があり、現地調達もここで求められる。PIMのホンダ協力会社社長で弁護士藤井ホドリゴ氏によると、「外資を含むブラジル国内企業が達成している内製化・現地調達の水準以上でなければ税金は軽減されない」。このため、すでにクラスターを形成しているホンダ現地法人に同業他社が対抗するのは容易ではない。

エアコンや食糧・物流 中国勢の活発な動き

サムスンとLGはマナウスで1995年から生産を開始した。アジア通貨危機の直撃を受けた後、本格的な投資拡大が始まったのは2000年ごろからである。対照的に、それまで電気・電子部門をリードしていた日系企業は撤退や生産縮小が相次いだ。近年ではコロナ禍の2021年にソニーやキャノンが工場を閉鎖し、パナソニックが一部製品の生産を終了した。

企業が撤退してもZFMがそのまま縮小するわけではない。現地からの報道によると、ソニーの工場は地場企業が家電生産のため購入し、ノキアの旧工場は現在、米国に本部を



置く電子機器メーカーが保有している。IT関連企業は、ZFMで税を優遇してもらう代わりに、総売上高から部品などの購入費や税を差し引いた額の5%をアマゾン西部やアマパ州での研究開発投資に回すことが法的に義務付けられている。サムスは2003年、マナウスに研究所SIDIAを設置し、ソフトウェアやコンテンツを制作し、現在はPIM最大の研究開発投資企業になっているという(アマゾナス州経済開発科学技術革新局=SEDECTI)。SEDECTIは日立Astemoがもつ二輪車の電動化技術にも期待を寄せる。ホンダ系3社と日立オートモティブシステムズが経営統合して2021年に発足した日立Astemoはマナウスに現法3社を保有する。

ホンダやサムスンほどの大規模工場はないが、近年は中国系企業も目立っている。たとえばエアコン。マナウスはエアコンの生産拠点になっており、日本のダイキン、韓国のサムスン、スウェーデンのエレクトロラックス、米国のワールプール、ブラジルのエルジンなどのほか、中国ミデア(Midea=美的集団、広東省)と米キャリアの合併会社や、グリー(Gree、広東省)も参入している。マナウスの国際企業の動きに詳しい弁護士のヘナト・ボナジマン氏は「中国はZFMよりもむしろ食糧供給網や物流の確保のためにアマゾナス州に目を向けている」と指摘し、製造業以外の業種での中国企業の活発な動きにも注目している。電気・電子部門ではフォックスコンなどの台湾系企業も目立つ。



▲マナウス工業団地で垂直型の企業グループを形成したホンダ現地法人

税制など制度変更を警戒 犯罪など都市問題に悩み

進出企業はルラ政権の税制改革を警戒している。これまでの恩恵が相対的に減る恐れがあるためである。憲法上、ZFMでの優遇措置は2073年まで継続されるが、税制が根本的に変わると先行きが読めなくなる。日系企業は日本とメルコスルの経済連携協定(EPA)締結も歓迎していない。「ZFMにとってのメリットはない」(アマゾナス日系商工会議所)と考えるからである。陸の孤島に立地する理由は税制優遇しかないため、在マナウスの企業は他地域に立地する企業とは異なる視点で将来を見据え、投資判断をしている。

都市化に伴う諸問題も日系企業を悩ませる。増える住民を十分に雇用できないと犯罪が増える。PIMに通う従業員向け送迎バスが強盗に襲われる事件が頻繁に発生し、経営陣は頭を抱えている。従業員に対する給与の支払いが安定している日系企業のバスが狙われやすいという。アマゾン川の水運による麻薬密輸も盛んといわれる。

「病院や学校、警官・パトカーが足りない」(武蔵精密工業現法のホナウド・ボスコ社長)。新型コロナ流行の際、マナウスで医療崩壊が起きたのは政府の失敗と考えられているが、医療体制が人口規模に追いついていないことも一因だろう。環境衛生の悪化も甚だしく、かつて熱帯魚が泳いでいた市内の川は汚染され、悪臭が漂う。2023年の干ばつはアマゾン川の水運を困難にし、企業が生産停止に追い込まれるなど、環境変動の影響も重大である。

人口増は政治的発言力の上昇、ひいてはアマゾン西部の権益保持につながる。しかし、地域の健全な発展のために必要なのは、競争力のある産業を育成し、優遇税制への依存度を下げ、利益を地域の問題解決に還元することだろう。

(文責: 松野哲朗 中央大・神奈川大非常勤講師)



アマゾンのSDGs農業開発 パラ州の事例

『ブラジル特報』編集部



アマゾン農業？

アマゾン農業というタームでアマゾン地域の農業全般を語ろうとすれば、それは何とも大変なことになる。無謀といってもよいだろう。というのも、(ドットコムでない本来の)アマゾンが意味する対象地域が広義の場合、ブラジル全土の5割以上をカバーする、とんでもなく広い地域を指すからである。

ブラジルにおける「法定アマゾン」(ポ語で *Amazônia Legal*) とは、州名を列記すると、アクレ州、アマパ州、アマソナス州、パラ州、マトグロッソ州、トカンチンス州、 Rondônia 州、ロライマ州、の全州とマラニャン州の一部(西部)をカバーしており、平方キロ数値でいくと、5,217,423km² となり、これはブラジル全土の面積のおよそ 61% に相当する。従って、バイオーム(生物群系)では、熱帯降雨林が主体だが、亜熱帯降雨林もあればセラード地帯も含まれる。単にアマゾンにおける農業といっても、これだけ広域(日本の 10 倍以上!)において行われている農業活動について記述するならば、熱帯果樹栽培から大豆やトウモロコシ、綿花まで目配りしなければならないことになる。

本稿では、この広大なアマゾン地域全体のうちの、東部アマゾンのパラ州(州都はベレン)において展開されている農業の具体的な事例について略述してみたい。

単一栽培型農業事例 ～急成長したパイナップル栽培

ブラジルのシュラスコ店でおいしいお肉を楽しむとすれば、コステラ(リブ)、クッピン(ゼブー牛のこぶ肉)、ピカーニャ(イチボ)などをたらふく食べたあとに必ず登場

するのが焼きパイナップルである。パイナップルには肉を柔らかくする消化酵素が含まれているので、実に合理的な“肉食後のデザート”であるが、その産地はどこだろうか。サンパウロのシュラスコであれば、まずミナスジェライス産だろうし、もしレシーフェあたりのシュラスコであれば、ほぼ間違いなくパラíba 産である。これは、ミナス州とパラíba 州の両州が伝統的なパイナップル主産地であるからだ。

ちなみに、いうまでもないことだが、パイナップルの原産地、元々のルーツはブラジルである。そのことを、たまたま読み進めていた『大航海時代叢書』(岩波書店)で再確認することになったので、まず、その 16 世紀のフランス人旅行記作家の記録「南極フランス異聞」(大航海時代叢書第Ⅱ期 19 巻)の関連部分を読んでみよう。

「彼ら(先住民)が病気のとき最もよく利用する果物はナナと呼ばれるものである。これは中くらいの南瓜の大きさと、外まわりは松の実のような様子をしている。熟れると黄色くなり、香りも味も驚くほどすばらしく、砂糖以上に甘い。保存用に加工したものでなければ、わが国に持ち帰ることはできない。熟した実は長持ちしないのである。さらに、この果物には種子がない。だから、わが国で接ぎ木をする時のように、小さな若芽を切って植える。熟す前の実は非常にえぐくて口がひん曲がるほどである。」

この著者アンドレ・テヴェは、1555 年から 56 年にかけて当時フランスの居留地であった「南極フランス」(現在のリオデジャネイロ)に滞在した、その記録がこの「南極フランス異聞」であった。この南米におけるフランス植民地「南極フランス」は開設から 10 数年後の 1567 年ポルトガルによって破壊され、その跡地に創設されたのがリオデジャネイロとなった、とブラジル史の教科書では書かれている。フランスのユグノー(カルヴァン派)によって開拓された居留地にもパイナップルの原種があちこちに自然に生えていたのだ。

と、パイナップルのルーツを一点集中的に再確認したが、このトロピカルフルーツの

代表格のブラジルにおける商業的な栽培が広まったのは、ミナスジェライスの南部、「三角ミナス」とよばれる地域と北東部のパラíba の二カ所であった。

そんな伝統的なパイナップル生産地に挑戦し、1990 年代から急速にパイナップル栽培を広めたのがパラ州南東部のフロレスタ・アラグアイア郡である。現在、同郡におけるパイナップル生産量はおよそ年間 27 万トンで、パラ州全体の生産量の 8 割近くをしめており、2020 年度のブラジル全体のパイナップル生産量 163 万トンと比較すれば単独で 17% のシェアとなっている。文字通り「ブラジル最大のパイナップル生産郡」である。同郡の公式 HP を覗いてみると、自分の町を“A Capital do Abacaxi (パイナップルの首都)”と誇らしげに宣伝しているが、町のシンボルマークもパイナップルを模しており、文字通りパイナップルでメシを食っていることが了解される。

先住民がまばらに住み着いていた同地に集落が形成されたのは 20 世紀に入ってからで、経済開発が始まったのは 1970 年代以降という新興地域がムニシピオ(郡)に昇格したのは 1993 年だ。その頃から急速に栽培が拡大したパイナップルの加工に対応すべく濃縮果汁加工工場 FLORA 社(社名:フロレスタ・アラグアイア食品加工術)が創設されたのは 1998 年だ。現在の加工能力は月間 4,000 トンで、その製品はブラジル国内はもとより、海外(米国、欧州、中東諸国)へも輸出されている。栽培から物流や加工部門まで、パイナップルに経済的に依存している家族数は約 7,000 とのことだ。

ここで、ブラジル全体の統計数値を再確認しておこう。

IBGE(地理統計院)によれば、2020 年の州別パイナップル生産量は

- ①パラ州…………… 357,021 トン (全体の 21.8%)
- ②パラíba 州…………… 272,285 トン (16.6%)
- ③ミナスジェライス州…… 173,853 トン

▲パラ州フロレスタ・アラグアイア郡のシンボルマーク



(10.6%)

④リオデジャネイロ州…… 143,454 トン (8.1%)

となっているが、ミナス州の生産量は漸減傾向にあるので、パラ州の占める割合が今後とも高まっていくとみられている。

アグロフォレストリー型農業 ～カカオ栽培事例

アマゾン地域におけるカカオ栽培は 17 世紀に始まったが、栽培が拡大するのは 21 世紀に入ってからである。簡単な歴史を追いかけておこう。

軍政時代の 1970 年代、国家統合の手段としてトランスアマゾニカと称されたアマゾン横断道路(BR230)を突貫工事で開通させたが、1974 年に策定された POLAMAZONIA(アマゾン農牧畜・農鉱業開発プログラム)によって、パラ州中央部に位置するアルタミラ、メディシランディアといった現在カカオ栽培の中心地となっている町が開拓される。この北伯開発計画の一環として PROCACAU(カカオ栽培振興計画)が 1976 年に策定され、10 年間でカカオの栽培面積を 30 万 ha(アマゾン 16 万 ha、パイア 14 万 ha)も拡大する目標がたてられたが、そうした計画通りには全くなかった。

このカカオ栽培の拡大が具体化していくのは 1990 年代以降であるが、これはひとえに「農業と森林の共生」を志向するアグロフォレストリー農法が確立されたおかげであった。トメアスー農協が試行錯誤の末、様々な種類の植物・農作物・樹種を組み合わせる農法を生み出し、そのノウハウをアマゾン近隣地区の農家にも開示したことで、アマゾン地域全般の”持続可能な農業と環境の共存”が具現化し始めたからだ。このアグロフォレストリーで栽培されたカカオやアサイーは生産性も高いことが確認されてきている。

21 世紀に入ると、ハイブリッド苗の生産・配布を始めとする農家支援体制が、州政府レベルでも地元市町村レベルでも具体化し、これがパラ州全般のカカオ生産量の増加という好循環をもたらしている。

パラ州政府の資料に基づいて、パラ州のカカオ生産量推移(単位:1,000 トン)をみてみよう。

- 1970 年 1.5 ⇒ 1975 年 1.7 ⇒
- ⇒ 1980 年 8 ⇒ 1985 年 22 ⇒
- ⇒ 1995 年 15 ⇒ 2006 年 36 ⇒
- ⇒ 2008 年 52 ⇒ 2010 年 62 ⇒
- ⇒ 2011 年 72 ⇒ 2012 年 85 ⇒
- ⇒ 2015 年 106 ⇒ 2016 年 86 ⇒



▲カカオ

⇒ 2019 年 130 ⇒ 2020 年 144 ⇒
⇒ 2022 年 146

となっているので、過去 50 年間で生産量はほぼ 100 倍となった。

収穫面積(単位:1,000ha)の推移をみると、2010年80⇒2012年94⇒2015年128⇒2021年188 となっている。

こうしてカカオ栽培主産地へ成長したパラ州は、2019 年にはじめてパイアを抜いてブラジル最大のカカオ生産州となった。(パイアの 10.5 万トンに対しパラは 13 万トン、翌 2020 年は、パラ 14.4 万トン、パイア 11.8 万トン、2022 年はパラ 14.6 万トン、パイア 10.9 万トン)もう一点注目すべき点は、生産性の高さだ。2022 年のデータによれば、単位面積(ha)当りの生産量は、パラ州の 955kg/ha に対し、パイアは 268kg/ha だったから、パラのほうが 3 倍以上の生産性がある。

アサイーの事例

先住インディオの伝統的な食文化であったアサイーは、地元パラ州では、朝食でファリーニャ(マンジョカ粉)とまぜこぜにして食べたり、ジェラートとしてかじったりと、基本的に地産地消されていた。その健康機能性が注目を浴び、リオやサンパウロのスポーツジム関連で働く若者たちに広まったのは 1990 年代に入ってからであり、そこから米国にも市場が拡大していくことになる。すなわち、サンパウロであれレシーフェであれ、街頭のジュースバーで普通にアサイーを食することなど 1980 年代には全く見られなかったのだ。21 世紀に入って需要が拡大するにあたり、それまでの野生採集だけでは追いつかなくなったこともあって、アグロフォレストリー型のアサイー栽培が広まっていく。

EMBRAPA(ブラジル農牧研究公社)の報告書によれば、アサイー(ピューレ製品

ベース)の市場規模は、年間 22 万 4 千トンで、市場別の需要シェアは、地元パラ州 60%、他州(サンパウロ、リオなど) 30%、輸出(米国や日本) 10%(これは 2014 年のデータ)となっており、パラ州における栽培面積は、2010 年 6,886ha が 2022 年には 53,375ha と 12 年間で 675% 増という急増ぶりが明らかだ。アサイー関連経済で動くオカネの総額は 50 億レアル(約 1500 億円)とみられている。

6 月 20 日付け Forbes 誌(デジタル版)記事によれば、ブラジルのアブラヤシ事業大手 BBF(BrasilBioFuels)グループは、2030 年までに、アグロフォレストリー方式でアサイー+カカオ栽培を 3 万 ha まで広めると発表した。対象地域はパラ州とロライマ州で、新たな森林伐採はなく、耕作放棄地や元牧場などの地力低下で放置された土地での森林再生とアグロフォレストリー農法を展開する由である。



▲アサイー

アマゾンに根差す研究開発機関 INPA

『ブラジル特報』編集部

▼ JICA の支援により 2017 年に修復された観測塔（高さ 40 メートル）から見渡せるアマゾンの熱帯雨林（INPA 森林管理基地付近）



アマゾン地域特有の自然環境下で生きる人々のニーズに応えようとして研究開発に励む頭脳集団がある。アマゾナス州マナウスに本部を置く組織として運営が始まって以来、今年 70 周年を迎える国立アマゾン研究所（INPA）である。その多彩な活動の一部を紹介しながら、地域発展の可能性を考えたい。

INPA には約 150 人の研究者のほか、技術者・アシスタントなどを含めて 500 人程度の職員がいる（2020 年時点）。教育機関でもあるため大学院生や研修生が 850 人在籍し、派遣スタッフなども含めると総勢 1600 人である。

管轄は科学技術革新省。資源開発の許可権限をもつブラジル環境・再生可能天然資源院（IBAMA）や、国立公園などを管理するシコ・メンデス生物多様性保全院（ICMbio）は環境省管轄であり、INPA とは役割が異なる。INPA ではアマゾンの天然資源の持続可能な活用が課題になっており、研究テーマとして 4 分野（生物多様性、環境力学、技術・イノベーション、社会・環境・健康）が挙げられている。

生物多様性を生かす開発

筆者は 2023 年 8 月、産業に活用できる新技術の一例として材木開発の現場取材した。自動車でマナウス中心部から北へ国道 174 号を 1 時間ほど走ったところを左折し、未舗装道路を 30 分ほど進むと、森林管理基地に到着する。

基地では研究者や院生がこれまで市場で取引されていなかった新たな材木を開発する作業をしていた。市場では無名のマタマタ、ブレウ、ロウロと呼ばれる樹木を使って、金属や接着剤を使わないパネルを試作していた。建築用に耐えられる強度やサイズを実現し、機械で生産し、販売するのが目標である。ポスドク研究者がいずれ工場を立ち上げる見込みである。案内してくれたニロ・ヒグチ博士（INPA 上級研究員）によると、現在は木材の 30% しか使われず、残りは捨てられるが、開発中の木材を採用すれば無駄になる割合を減らせるため、結果的に森林

の伐採面積も大幅に減るといふ。環境の持続性を考慮した産業創造の試みである。

国道と基地を結ぶ未舗装道路の両側は熱帯雨林であり、片側は森林保護区、もう片側は農業用地である。不思議なことに保護区と農業用地は見かけ上の区別がつかない。ヒグチ博士は「ここの農業は湿度や土壌などの管理が大変で競争力がないから開発が進まない」と指摘する。皮肉にも、農業ができないことが森林保全につながっているわけだ。

アマゾナス州にも農業はあるが、主要産物はマンジョカ（キャッサバ芋）のほかはバナナ、アサイー、パイナップルなどの果物である。人口増もあって穀物やたんばく源が不足しており、マナウス工業団地で生産した製品を州外に輸出する一方、食料を輸入する構図になっている。この過程で伝統的な一次産品が乱獲や外来品の流入によって失われ、地域住民の栄養不足が起きているという。

INPA はこうした食料事情にも対応している。社会包摂を目的とした技術開発分野の責任者であるデニジ・グチエレス博士は数多くの事例を紹介してくれた。たとえば、食用魚マトリンシヤを浅い川で家族が養殖できる技術の導入である。地域住民はアマゾンの川魚からたんばく質を摂取してきたが、博士は「乱獲により資源が減少している」と指摘する。彼女はさらに、「大規模な農業は環境破壊につながるが小規模なら問題ない」との認識から、家族によるアグロフォレストリーを推進するため、個々の農家が品種をどう組み合わせると合理的に生産できるかを判断できる手法を開発した例を示す。

このほか、針のないミツバチを使ったハチミツ生産技術、豊富な果物の加工・保存技術、ビタミン C が豊富な果物カムカムの皮の利用技術など、開発は多岐にわたる。食品以外にも、樹木由来の化粧

品向けの原料開発、倒木を使った楽器製造、魚の皮を使った靴・帽子・バッグの生産など、住民の生活に役立つ技術支援を実施している。アマゾン開発は森林を伐採するか否かの二者択一で議論されがちだが、生物多様性を踏まえた開発の可能性はジャングルのように奥深い。

国家主義から地球規模の貢献へ

元をたどれば、INPA は 1952 年、自力で内陸部を発展させたいと願った当時のヴァルガス大統領が発した大統領令によって生まれた。ナショナリズムが底流にある。その後発足した軍政期に活動は強化された。そして今、INPA は環境との共生や持続可能性を模索するグローバルな動きに沿って活動している。

ネックとなるのは予算の不足である。2023 年の INPA 予算は物価上昇にもかかわらず、前年より減っている。新旧大統領の相違点・共通点について、ヒグチ博士は指摘する。「前大統領は開発優先を明言して環境関連予算を減らした。一方、現大統領は環境重視を唱えつつも予算を現場に回さない。私たちにとって結果的に二人とも同じだ」。海外の諸機関との連携、海外からの支援はこれからも重要である。

（文責：松野哲朗 中央大・神奈川大非常勤講師）



INPA で進む新たな材木の開発現場（右がヒグチ博士）▲

植物由来代替魚肉製品の新展開

『ブラジル特報』編集部

EMBRAPA による植物由来代替魚肉の開発

2023 年 10 月から 11 月にかけてブラジルの主要紙やデジタルメディア UOL など大きく報道されたのが、EMBRAPA（ブラジル農牧研究公社）による 3D プリンター活用植物由来代替魚肉新製品開発の件であった。この記事によれば、EMBRAPA の専門チームは大豆、ひよこ豆、そら豆などを原料とする魚肉フィレ極似食品の開発に成功した。彼らは 3D プリンターを使って、見た目も食味もサーモンフィレそっくりの代替食品を開発し、民間企業と連携して商業ベースでの商品



▲ Fazenda Futuro 社のハンバーガー

開発まで展開したいとのことであった。魚フィレのほかキャビア極似製品やイカリング極似品なども披露されたが、試作品はなかなかの出来であった由だ。

この種の、いわゆるプラントベース食品に関しては、豆類を原料とするチキンナゲットやハンバーグなどは既に商品化されブラジルでも市場に出回っているが、EMBRAPA としてはそうした商品群よりもより完成度の高い魚フィレなどの開発に挑んだという。ビーガンないしベジタリアンの人たちが想定消費者であるが、商品を多様化することで一般消費者にも広がっていくものと期待されている。恐らく、商業ベースでの展開で一番ネックになるのは、製品の質（食感、味）よりもむしろ価格の問題だろう。当然ながら、本物よりは若干安めであることが要求されるからだ。製造コストを如何に下げるか、がポイントとなるはずだ。なにしろ、原料となる豆類はブラジルでは自給率 100% 以上であるからだ。

Fazenda Futuro 社の新商品投入

マルコス・レタ氏が仲間と植物由来代替肉加工のスタートアップ Fazenda Futuro（未来農場）を立ち上げたのは 2019 年のことであったが、同社の主要商品群は、植物性ハンバーグ、植物性ミートボール、植物性ソーセージ、植物性ひき肉タイプ、植物性キビ（アラブ風スナック）、植物性ツナ肉（フレックタイプ）等である。

リオデジャネイロ州ヴォルタ・ヘドンダに所在する加工場の生産数量は、月産能力 115 トンでスタート、2020 年 9 月の増設によって月産能力 600 トンへ、2021 年 11 月、投資ファンドから 3 億レアルを調達し、更なる増設を行った結果、現在の月産能力 1,300 トンとなっている。同社の植物肉製品の原材料は、大豆・ピーズ・エンドウ豆・ヒヨコ豆などであるが、植物性ツナ肉の主な原材料は、大豆・エンドウ豆・ヒヨコ豆・オリーブ油・赤カブとのことだ。

同社製品の販路はブラジル国内にとどまらず、海外（米国や欧州）への輸出も拡大中で、国内では「Fazenda Futuro」、海外では「Future Farm」ブランドで市場を攻略中である。

積極経営路線を続ける同社は 2023 年 7 月、新しい商品分野に参入した。それは豆乳に似たカラス麦乳製品（パック入り）で、味付けは 5 種類、①オリジナル風味、②バニラ風味、③チョコ風味、④バリスタ用、⑤ケーキ等調理用、となっている。代表取締役のマルコス・レタ氏によれば、ブラジルにおけるプラントベース食品市場での同社製品のマーケットシェアは 44% で、売上高は 2025 年までに 130% 増を見込んでいる由である。

欧米市場は“調整期”に突入か

2007 年米国カリフォルニアで創業されたビヨンド・ミートが、植物由来代替肉のスタートアップとしてはパイオニアといわれているが、「プラントベースフード」と呼ばれている植物由来代替肉の全世界の市場規模は、2020 年で約 43 億ドル（約 4,900 億円）であり、5 年後の 2025 年の見込み数値は 83 億ドル（約

▼ 4 つのフレーバーを備えた植物ベースのミルクライン



9,500 億円）となっていた。

米国の NPO 法人グッド・フード・インスティテュート（GFI.org）の報告によれば、米国の食肉市場全体に対する植物由来代替肉のシェアは 1.4% となっており、このシェア数字は伸長中とのことであった。

日本でも、食品会社の多くがプラントベース代替肉製品を開発・販売しており、いくつか例をメモしておく、キュービー（大豆ミートミックス）、大塚食品（ソイミート）、日本ハム（ナチュラルミート）、伊藤ハム（大豆ミートシリーズ）、マルコメ（大豆のお肉）、丸大食品（大豆ミートハンバーグ）、モスバーガー（大豆バーガー）、といったところだが、現在一番注目を浴びているのが、熊本に本社・工場を有するスタートアップ DAIZ 社（創業 2015 年）だろう。

ところが、こうした欧米市場における急成長予想が今年に入って次々とはずれ、特に米国市場におけるプラントベース食品の販売は弱含み傾向からマイナス成長になっている。

11 月 8 日付けロイター記事によれば、米国における代表的なプラントベース食品企業ビヨンド・ミート社の 2023 年第三四半期販売額は前期比マイナス 26%、前年同期比マイナス 8.7% となった。こうした販売不振の結果、同社の株価は、年初に比べ 45% も下落してしまった。あるアナリストによれば、「同社の代替肉製品は、消費者ニーズ、消費者の嗜好、消費者が求めるフレーバーに合致していない」から売れ行き不振となったのだ、と。

英国市場動向も似たようなもので、業界紙によれば、この市場傾向は slowdown（減速）というよりも shakedown（調整期）だとのことであるが、既に、有力企業 Meatless Farm 社は身売りされており、まさに調整期に入ったとみられている。

演劇界の革命児 ゼ・セルソを偲ぶ

小林大祐（『ブラジル特報』編集委員）



◀ José Celso
Martinez
Corrêa

サンパウロ再訪

サンパウロに行くので大学の先輩に連絡を取った。待ち合わせは日系駐在員らが常連の、定番中の定番 Bar do Juarez で話はまとまったが、さて、どの支店に行くかー。

先輩の提案は、Moema の本店だった。1999 年創業以来、人気を博し、Brooklin、Itaim Bibi、Pinheiros と市内要所に店を構え、いまでは Mooca (2021)、Santana (2022) とその地図を四方に広げる。私はだが、「今回は個人的推しの Mooca 店にさせてください」と懇願した。

サンパウロに暮らすことに魅せられていた時代、日系社会の新聞記者をしていた。1998 年からのことだ。そのころの日曜日といえば、市民はミサに通い、家族団らんの日でショッピングは休業、そんな牧歌的なところが好きだった。いまは電話帳の厚さに迫らんとする勢いの『Veja』誌のレストランガイドも当時は生ハムくらい薄く、名店などは両手で数えられた。

サンパウロはどんどん変貌していく。だが、人生は一方方向に進んでいるわけではなく、私はいまでもときどきサンパウロに戻るたびに消えつつある過去の名残を探す。すでに消えてしまった多くのことを探そうと後戻りする。

20 世紀中盤の典型的住宅街の中に立つ Mooca の Bar do Juarez からはセントロのビル群がかすんで見える。それがどうした？と言われれば、なんてことない。先輩の返信はメッセージ越しからもしぶしぶ感が伝わってきた。「ビールとピカーニャ。どの Juarez も一緒では？」

先輩は正しい。しかし、最近ではブラジルに戻るたびにかつての知人、あるいは同時代の著名人の訃報を聞くことになり、感傷に浸る機会が増えた。サンパウロの甘やかなノスタルジーを含んだ空気と一緒にビールを飲み干すことは、故人をしのぶことにほかならない。

ゼ・セルソの訃報

サンパウロに滞在中の 7 月、ブラジル演劇を変えた演出家・戯曲家・俳優の Zé Celso (本名 José Celso Martinez Corrêa) が自宅 (パライズ区のアパート) で起きた火事で亡くなった。享年 86 歳。Tropicália のラスボス的存在、最後までアバンギャルドな姿勢を貫いた。

何が起きるのかわからない。どこまでが演出で、どこからがアドリブなのか。音楽、ダンス、映像、儀式。あらゆる表現とパフォーマンスが詰まった濃密な祝祭的時空間が彼の演出の真骨頂だ。出演者と観客の隔てを無くし、劇場の全員で作り上げていく。その作品は猥雑なエネルギーに溢れ、筋書きや予定調和的な舞台からは程遠いものだった。それは、自分も何らかの分野でいつかは前衛の列に加わりたくと願った青年にとって憧憬の対象だった。

サンパウロ州アララクアラ生まれ。サンパウロ大学法学部で学び、1958 年に自身の劇団 Teatro Oficina を立ち上げた。ご多分に漏れず、体制批判の色濃い作品は当局の機嫌を損ね、軍事政権下には亡命 (ポルトガルで 6 年間) を余儀なくされた。

その作品歴はそうそうたるものだ。Oswaldo Andrade の『O Rei da Vela』、Chico Buarque の『Roda Viva』、Euclides da Cunha の『Os Sertões』、そして不世出の女優 Cacilda Becker までも自分の世界として表現した。2008 年の日本人移住 100 周年には神戸港からサントス港までの航路を戯曲化した『Taniko』を上演、能と禅について独自の解釈を示し、同作を称して『Nô Bossa Nova Tranzênico』とシャレた。

サンパウロの宝・オフィシーナ劇場

11 月の出張時、Bexiga 区を散策しながら彼の劇場 Teatro Oficina のある Jaceguai 通りまで歩いた。途中、Abolição 通りには彼をテーマにした大きな壁画が描かれているのを目にした。周囲には『Jardim』と呼ばれる長屋的な集落や、歴史的な家屋の Casa de Dona Yayá が残る。もちろん、かつて「サンパウロのブロードウェイ」と呼ばれた地域だから、くだんの Cacilda が活躍した Teatro Brasileiro de Comédia (TBC) など古き劇場の姿も健在だ。

改めて、Teatro Oficina が個人的に最もサンパウロらしい建築だと思う。古い建築のリノベーション。単管パイプの活用 (観覧席)。自然 (植物や水) の劇場内への取り込み。建物一部をガラス張りにして開放した外部への連続性。すべてが直線的。様式は Brutal。そうした要素が盛り込まれた幅 9m × 長さ 50m というありえない寸法の、廊下のような空間に初めて入ったとき、常識で凝固固まった頭をガツンと殴られた気がした。いわゆる「ステージ」がないのだから。それでも英 Guardian 紙は世界一優れた劇場の「建築部門」に選んだ。

劇場前には設計者を顕彰して Rua Lina Bo Bardi と記された標識板が立つ。公式の地図には存在していない通りだ。この劇場の真ん中を貫く「道」(舞台) が実験演劇という名の「通り」ということを示している。無論、サンパウロで最もアバンギャルドな通りだろう。

アバンギャルドは死なず

ただ、最近の自分はアバンギャルドから遠く離れている。Teatro Oficina に熱を上げていた時に知ってはいたがまったく興味を持たなかった Roberto Carlos の『De Tanto Amor』を口ずさみ、銭湯に浸かる週末を心待ちにするようになって久しい。同時期に吸収したもので人生の局面と加齢のフィルターによって浮き沈みがある。

だから、この原稿を書くにあたって、Zé Celso の作品を YouTube で振り返ってざっと見てみたが、かつてのように心を震わせることはなかった。それでも、自分は前衛の最後部の立ち見席にはまだいる、そう心のどこかで信じて疑わない。



▲オフィシーナ劇場

南米最大のアニメイベント 「Anime Friends」に出演して



川満スティーブ証
(川満アート・テイメント代表取締役)

「AIP」とは

今年 20 周年を記念し、日本文化のアニソンとアイドルを融合した新たな「アニソンアイドルグループ」を生み出すオーディションを開催。それがアニソンアイドルプロジェクト「AIP」だ。応募総数 213 名。書類審査の通過者が bless4 スタジオに集まった。

2 次審査は課題曲の歌唱審査。審査員である bless4 を目の前に、緊張とプレッシャーで歌えない出場者。涙を堪えながら思いを語る者もいた。24 名が通過し、ダンスと歌唱を同時に披露する 3 次審査は、より高い難易度が求められた。男子メンバーの審査では、緊張が連鎖し思うようなパフォーマンスが出来ない出場者が続出。

1 日かけて行われた 2 次・3 次審査を通過し本選出場の切符を手にしたのは 19 名。この日から bless4 による特別訓練を開始。AKASHI が体力基礎トレーニング、KANASA はダンス、そして AKINO はボイトレを担当。レッスンでの立ち振る舞いも審査に大きく影響する。次から次に出される課題点。踊りながら歌う課題は特に難易度が高く、苦戦する。4 次審査では、定められた 4 グループが緊張で張り詰めた空気の中で課題曲の歌とダンスを順番に披露。多少のミスはあるものの、揃えられたダンスと感情溢れる歌声からは迫力を感じた。審査終了、ここで惜しくも 7 名が敗退。全員に愛情をもって教えてきたからこそ、悩みに悩んだ結果だった。



最終選考から離日まで

6 月某日。約 2 ヶ月に渡って行われてきた AIP も最終局面。普段は個人で活動するメンバーも多く、プライド・焦り・不安・苛立ち、それらの感情によるすれ違いが生まれる一面もあったが、このチャンスを掴み取りたい。共に努力してきた仲間と共に頑張りたいという熱い気持ちがパフォーマンスや表情からひしひしと伝わる。

それぞれの良さ、パフォーマンス力の高さ、甲乙付け難い出来栄で審査も意見が割れたという。今回初のオーディションではあったが、全身全霊で「Anime Friends」に向け努力し成長し、遂に 8 名のメンバーが決定した。最後の練習日はプロジェクトにサポートを頂いている企業の方々を招待し、ブラジルで披露するパフォーマンスのお披露目。

サンパウロ会場にて

4 日間にわたり 4 ステージに出演した。本オーディションにブラジルからエントリーしてくれた Nivea が特別メンバーとして合流する予定だが、実際に練習できたのは本番 30 分前だったという。初出演となるステージは Anime Friends で 1 番大きなメインステージ。

AIP 出演の直前、サプライズで bless4 が 1 曲披露し、会場の盛り上がりは最骨頂。AIP の 8 名がステージに立つと割れんばかりの歓声が上がった。

パフォーマンスに合わせて観客全員が大合唱。日本のアニソンがブラジルでとても愛されている事がよく分かる。途中、曲がかからないハプニングもあったが、観客が拍手や歓声をあげトラブルも楽しめるととても温かい会場だった。そして Nivea を交えてのパフォーマンス。流石のラップテクニックで会場を沸かした。本番 30 分前に初合わせしたとは思えない一体感で無事初日が終了。

2 日目は中規模のウルトラステージ。初日とは違い AIP がステージに立つ観客数 10 名。Anime Friends では全部で 5 ステージあり、どれも同時進行でライブが開催される為、観客の心をどう掴むかが鍵となる。

観客数 10 名というシビアなスタートだったが、アニソンや K-POP を歌うにつれて会場内には観客が集まり、最後には大盛り上がりで無事ステージを終えた。AIP のメンバーは毎晩ミーティングを行い、翌日に向けてブラッシュアップしていたのだが、AKASHI からとんでもない無茶振りが言い渡された。

「明日からの K-POP ステージに立つために今から曲を増やしましょう」と。一同耳を疑うも AKASHI は本気だ。早急に候補を挙げ、人気 K-POP 3 曲のサビメドレーをする事が決定。3・4 日目は K-POP ステージ。ブラジルはアニソン同様、K-POP も人気があるようだ。追加のメドレーも無事に披露し、K-POP ステージの 2 日間も大いに盛り上がりブラジルでの全出演を無事に終えた。この期間、報道陣に向けた記者会見が 2 回、お客さんの質問に答える Q&A コーナーにも出演。

様々なハプニングはあったものの無事に出演を果たし帰国する事ができた。今回の AIP アニソンアイドルプロジェクトはこれで終了だが、二期・三期と続いていく事が決定している。今後の AIP の活動にもまた注目してほしい。

電子署名

1. 電子署名の普及

書類の電子化やリモートワークの普及などを理由にブラジルにおいても電子署名の利用が拡大している。多くの会社が電子署名サービスを提供しているが、ブラジル政府も2020年から「Assinatura Eletrônica」という電子署名のプラットフォームを無償提供している。ブラジルの公共サービス管理改革省（Ministério da Gestão e da Inovação em Serviços Públicos）が2023年9月に発表したデータによると、同サービスによる電子署名はこの3年間で5000万件を超えている。

2. 電子署名に関する法律

電子署名について最初に規定した法律は暫定措置令2001年2200-2号（Medida Provisória nº 2.200-2/2001）である（同暫定措置令は暫定措置令のまま現在も効力を有している）。同暫定措置令に基づき、国立情報技術研究所（Instituto Nacional de Tecnologia da Informação）により認証されたICP-Brasil（Infra-Estrutura de Chaves Públicas Brasileira）という公開鍵基盤によるデジタル証明書が発行できるようになった。そして、上記暫定措置令は、ICP-Brasil基準の電子署名に基づき署名された文書は真実であると推定されると規定した。しかし、ICP-Brasil基準の電子署名を利用するためにはある程度のコストが発生するため、日常的に利用するにはハードルがあった。そこで、2020年に法14063号が制定され、後述のとおり電子署名の種類を増やし、取引や行為のリスクに応じて異なる電子署名を使えるようにした。そして、2023年に、電子署名により署名された文書についても裁判外の債務名義として認められることを規定した2023年法14620号が制定された。

3. 電子署名の種類

2020年法14063号は、以下の3つの電子署名を規定した。

- ①簡易電子署名（Assinatura eletrônica simples）
- ②高度電子署名（Assinatura eletrônica avançada）
- ③適格電子署名（Assinatura eletrônica qualificada）

これらは署名者の本人確認や使用されるセキュリティ対策によって分類されている。簡易電子署名における本人確認は簡易な方法で行われ（個人納税者登録番号（CPF）、電子メール、パスワードなどの一般的な本人確認方法）、セキュリティもほかに比べればそれほど高度なものは要求されていない。高度電子署名における本人確認はデジタルID（これは必ずしもICP-Brasil基準である必要はない）が利用されるため署名者が実際に本人であることの証明が容易になる。また、高度電子署名では署名された文書の変更が検知



柏 健吾
（TMI 総合法律事務所
日本法弁護士現在ブラジルで勤務）

できるようになっており、セキュリティ対策も高いレベルが要求される。適格電子署名はICP-Brasilに準拠したデジタルIDにより本人確認が行われ、セキュリティ対策も最も高いレベルが要求される。

それぞれの電子署名は取引や行為のリスクの大きさや重要性によって使い分けられている。簡易電子署名は、公的機関のサービスに関する予約などリスクの低い取引に使用される。高度電子署名は重要な取引で使用される。たとえば、銀行に関する取引については一般に高度電子署名が要求される。適格電子署名も重要な取引で使われるが、適格電子署名の利用が法律で義務付けられているものもある。たとえば、特別な医薬品に関する処方箋の発行や不動産の譲渡に関する契約などである。

4. 裁判外の債務名義

債務者に対して強制執行する方法は大きく分けて2つある。裁判上の債務名義に基づく場合と裁判外の債務名義に基づく場合である。裁判上の債務名義のもっとも一般的なのは裁判所による判決である。裁判外の債務名義には小切手、手形、公正証書、証人（Testemunha）2人の署名がある契約などがある。裁判外の債務名義を有していれば裁判を提起して自らの権利があることを主張・立証する必要がある。2023年法14620号は、裁判外の債務名義のうち、証人2人の署名がある契約について大きな改正を行った。

ブラジルでは、契約書を作成する際に、契約の当事者以外に2人の証人が署名することが一般的である。証人2名が契約書に署名することで、契約の存在、真正性及び完全性が担保されるという理解のもと、証人2名の署名があれば裁判外の債務名義として認められているためである。この点、電子署名による契約締結の場合、電子署名プラットフォームにより本人確認が行われているため、証人2名による署名がなくても、契約の存在、真正性及び完全性が担保されるのではないかとすることが大きな議論となっていた。高等司法裁判所は、証人2名による署名がなくても裁判外の債務名義になり得るとの判断を示していたが、2023年法14620号は民事訴訟法を改正する形で証人2名の署名がなくても裁判外の債務名義になり得ることを法律上も明記した。具体的には、民事訴訟法784条に新たに4項が追加され、裁判外の債務名義に関して、「電子署名プラットフォームによってその完全性が認証された場合には、証人の署名は不要となる」と規定された。同項は電子署名の種類について「法律で規定されたあらゆる種類の電子署名が認められる」と規定しているが、適格電子署名以外の署名でも裁判外の債務名義になり得るかは議論がある。今後この点は裁判例の積み重ねにより明確になっていくものと思われるが、裁判所の判断が確立するまでは重要な取引に関しては適格電子署名を利用することが推奨される。

ブラジル移転価格制度の動向、及び企業が取り組むべきこと 移転価格制度改正と ガイドラインの公表を受けて



エドソン・コスタ
（KPMG ブラジル 移転
価格税制パートナー）



天野義仁
（KPMG
ブラジルジャパン
デスク責任者）



三上智大
（KPMG ブラジル
ジャパンデスク
マネージャー）

2023年9月号では、ブラジルの移転価格制度が、独立企業間原則を遵守するという、OECD ガイドラインに適合した制度に改正される旨を紹介している。

今般、法律の制定に加え、ブラジル連邦歳入庁（Receita Federal do Brasil, RFB）は2023年9月29日、規範指令2,161号/23を公表した。以下では、ブラジルの移転価格制度に関連する特徴や変更点を紹介したい。

▶ RFBは、2023年にこの制度を採用する（つまり、2023年1月1日に遡って適用する）か、2024年1月1日までに強制適用するかを選択肢を納税者に与えている。

▶ 当初、任意適用を選択する期限は2023年9月（規範指令2,161号/23）であったが、2023年11月に延期されることが、規範指令の草案公表時に既に発表されている。当該期限はさらに延長され、納税者は、2023年12月31日までにRFBのオンラインポータル（e-CAC）で早期適用を選択できるようになり、早期適用による影響についてより詳細な分析を行う時間が確保された。

規範指令2,161号/23の最終版では、文書化要件に関してもかなりの改善が見られている。納税者は以下の3つのカテゴリーに分類される：

▶ 関連当事者間取引が5億ブラジルレアル（現在の為替レートで約1億米ドル）以上の納税者は、完全なマスターファイルとローカルファイルを提出する必要がある。RFBは英語又はスペイン語のマスターファイルを受理するが、RFBがポルトガル語への翻訳を要求する可能性がある。

▶ 第2のカテゴリーには、関連当事者間取引が1,500万ブラジルレアル以上（現在の為替レートで約300万米ドル）、5億ブラジルレアル未満の納税者が含まれる。これらの納税者は、移転価格に関するごく基本的な情報を含む簡易的なローカルファイルを提出する必要がある。

▶ 最後のカテゴリーである1,500万ブラジルレアル未満の関連当事者間取引を行う納税者は、移転価格文書の提出が免除されるが、取引において独立企業間原則を遵守する必要がある。

▶ 興味深いのは、規範指令2,161号/23第56条である。当該条項では、納税者は電子法人所得税申告書（ECF）の一部として、一定の移転価格情報を提示することが義務付けられている。原則として、移転価格文書はECF提出後3ヵ月以内に提出しなければならないことから、納税者はそのかなり前に、少なくとも部分的な準備をしておく必要がある。2023年と2024年分の移転価格申告書は、早期適用者は2024年12月31日までに、通常適用者は2025年12月31日までに提出する必要がある。

移転価格算定方法に関するRFBの解釈は、OECDガイドライ

ンに非常に近いものとなっている。また、独立企業間価格をもたらし限り、他の手法の使用も認められており、無形資産の移転価格算定で広く使用されている算定方法が主に参照されている。さらに、非標準的なビジネスモデルや複雑な取引等において、独立企業間価格をもたらしることが可能な他の算定方法の使用が認められることは、納税者に一定の柔軟性を与える可能性がある。

しかしながら、他の税金に対する補償的調整の影響については、不確実性が増している。補償的調整とは、対象となる取引を行ったブラジルに所在する法人と他の関連当事者の帳簿において、対称的かつ確定的にその価値を調整し、対象となる取引の条件が独立企業間原則に従って設定されていた場合と同等の結果が得られるようにすることを目的として、対象となる取引の当事者によって行われるものである。最も一般的な補償的調整は、取引単位営業利益法（TNMM）の枠組みの下で、取引の複雑性の低い当事者に目標営業利益を確保するための期末移転価格調整である。規範指令の草案時の文言では、特定の条件下での補償的調整の実施は他の税金に影響を与えない、という解釈の余地を残していたが、この度公表された規範指令では、このような文言はなくなり、補償的調整が自動的に他の税金の調整の引き金になることはないという文言だけが残っている。特に輸入に依存し、TNMMを適用する納税者にとっては、解釈はより不確実なものとなった。

新移転価格制度では概念的な観点から旧制度からの多くの変更があるため、納税者は、移転価格制度や対象取引に対するアプローチを全面的に見直さなければならない。従って、新旧移転価格制度の乖離を考慮すると、納税者は今後いくつかの課題に直面する可能性がある。主な議論と傾向として次が挙げられる：

▶ 利益水準…現行移転価格制度では、移転価格分析と文書化は、製品、サービスの企業間価格に焦点を当てていた。そのため、企業は利益水準指標（PLI）よりもむしろ、売上総利益率やマークアップに重点を置いていた。新移転価格制度では、企業は制度を遵守するために、適用される算定方法に従ってPLIを達成する必要がある。これは、特に経常損失を計上している企業が注目すべきトピックである。

▶ 無形資産…新移転価格制度は、無形資産取引に関しても変化をもたらしている。ブラジルの企業は、現在のアプローチを見直し、ロイヤリティを含む無形資産の関連当事者間の請求額を基礎とした独立企業間価格を考慮する必要がある。

▶ 事業再編…従来の規制には含まれていなかったため、新制度では検討・対処すべき全く新しい要素となっている。

▶ 検証対象…移転価格算定上の検証対象は、必ずしもブラジル法人とは限らない。その代わり、企業の機能的な特徴や複雑性を考慮し、管理された取引のどの当事者を検証対象とみなすべきかをより適切に評価する必要がある。

『私とは』



江口ルシアナ宏子
(大学生・日本語教師)

「ブラジル特報」に記事を掲載するにあたり、どんな内容が求められているのか、私が皆さんに伝えたいことはなにかと考えたとき、日系人としての自分とはなにか、ブラジル、日本と居住してみて抱いた自分という人間のアイデンティティと葛藤を共有できればと思う。

私の身体的特徴としては9割方ブラジル人だが、幼少期を日本で過ごしている折、このはっきりとした顔、がっしりとした体つき、周囲と違う自分自身がとても異質に感じ子供ながらに嫌だった記憶がある。しかし、ブラジルに帰った折、周囲と“同じ”という感覚、周りに溶け込める感覚を本当の意味で初めて経験できた気がした。こういった類の話や体験は聞き馴染みが多いと思われるが、一同に経験してみないとわからないものだ。例えば、ブラジル中央協会の開催する大泉町ツアーに参加した際、出身地の三重とはまた違ったブラジルコミュニティに驚愕するばかりであった。

日系ブラジル人のアイデンティティについての意見は多様であり、それぞれが異なる経験と感情を抱いていると思われるが、多くの日系人はブラジルにおける彼らの歴史と文化が、彼らのアイデンティティに深く影響を与えていると日常の中で感じ、コミュニティを形成し“同じ”もの同士で繋がろうとするのではないかな。

私を含めた一部の日系人は、日本からの先祖をルーツに持つことで、様々な選択やチャンスを得られ、日本とのつながりに誇りに持っていると考えるが、彼らは伝統的な日本文化や価値観を大切に、それがアイデンティティの一部となっている。それと同時に、ブラジルで生まれ育った経験をした者はさらにブラジル文化とも深い結びつきを感じているといえるだろう。

またある一方では、日本との直接的なつながりよりも、ブラジル社会での経験がより重要であると考える者もいることだろう。ブラジル人としてのアイデンティティを強く意識し、国内の多様な文化との交流を重視し、言語や食文化など、ブラジルの要素がアイデンティティに深く刻まれている。

私自身でいえば時と場合により、この二つの価値観や意識を自分の中で落とし込みつつ適応するものを表面に出し、片方ではなく、二つのものを持つ者としての思考や行動をするように心がけている側面であると考え。簡単な物言いであろうと、ワールドカップではブラジルの強さに誇りを抱きつつ、日本人の会場を整理整頓にした状態で帰宅するという行動にも誇りを持っているところだろうか。

各々のアイデンティティにおいては、日系人という一括りにしつつも、コミュニティ内でも異なるバックグラウンドや世代による違いが存在するが、若い世代は、両文化を柔軟に受け入れ、融合させることで、新たなアイデンティティを築くことができる。一方で、年配の日系人は、伝統やルーツを重視し、日本の文化を守り続ける姿勢を持っているように見える。総じて、日系ブラジル人のアイデンティティは多層的で複雑であり、個々の経験や価値観が影響を与えている。しかし、共通して認識されているのは、二つの異なる文化を抱えることで得た豊かな経験が、私たちのアイデンティティを形成しているという点だ。

日系ブラジル人として生まれ育ったことは、私にとっての誇りであり、唯一無二の経験であると心得ている。この二つの異なる文化を抱えることは、私のアイデンティティに深い豊かさをもたらしている。

まず、日本の伝統や文化は私にとって生活の中で重要な要素となっているが、祖父母から受け継いだ言葉や幼稚園、小学校の文化的習慣、祭りや行事は、私の人としての礎であり、それだけでなく、日本の価値観や労働倫理も、私の生き方に大きな影響を与えている。

その一方で、ブラジルでの生活も私にとって必要不可欠な一部である。家族の存在、そのあり方、多様な文化や人々との交流は、私を自由で開かれた思考にし、異なる視点を理解し、受容する力を養ってくるのに重要だった。ブラジルのおおらかな雰囲気や音楽、カーニバルのようなお祭りは、自分という人間を形成する大事な要素となっている。

この二重のアイデンティティを抱えることは、時に自身の中で葛藤も生んだが、それが逆に私を強くし、柔軟性を養ってくれていると信じている。

今言語学を専攻しながら大学に通い、日系ブラジル人として、両国の架け橋となる責任も感じているが、日系人文化や言葉の違いがあっても、共通の理解と尊重を大切に、両者の素晴らしい要素を結びつけ、新たな可能性を言語を通して生み出していきたいと考えている。

私の日系ブラジル人としての自己認識の共有をしたが、同じくらい興味深いのはこれを今読んでる読者のストーリーだと考え。機会があればぜひ声をかけていただきたい。皆様とお話することで、私たちの知識や見識が拡がり、異なるバックグラウンドを持つ人との交流で、新たなアイデアや可能性を生み出すことができるだろうと思う。



『ペルリンプスと秘密の森』監督来日

服部 章子

2023年11月中旬、映画のプロモーションの為にアレ・アブレウ監督とヴィヴィアーニ助監督が来日した。監督は前作「父を探して」に続く2回目の来日。日本文化との出会いは子供の頃、音楽監督で幼馴染の日系三世アンドレ・ホソイ氏の家に遊びに行った時だそう。

監督のパートナーで初来日のヴィヴィアーニ助監督は、大学の建築学科を卒業後、パリの名門アニメーション・スクール「ゴブラン」に留学。母国語の他に英語、フランス語、ドイツ語を卒なくこなす。コミュニケーション力抜群で取材中は幾度となく助け舟を出してくれ、裏話や取材者の興味をくすぐるようなネタをいつも繰り出してくれた。「クラエのモデルは絶滅危惧種のタテガミオオカミなの。」と写真を見せ、「主人公の2人が「電動リス!」「青いパンダ!」と喧嘩するセリフがあったのよ。カットされちゃったけど。」などなど。「ペルリンプス」製作では助監督としてだけでなく、工程スケジュール管理や監督とスタッフとのコミュニケーションの橋渡し役などマルチな才能を発揮した。映画最後のクレジット随所に彼女の名が見られる。間違いなく、この映画の影の立役者だ。

ジャーナリストの旅路

ポルトガル語に「一苦労」

田中健吾
(時事通信サンパウロ支局長)

ブラジル最大都市サンパウロの特派員に3月に着任し、早くも年末を迎えることになった。公用語のポルトガル語は初心者で、自身の年齢も50半ばに差し掛かり、慣れるのに一苦労している。

実は海外赴任先としてブラジは4カ国目。最初は、欧州連合(EU)や北大西洋条約機構(NATO)という国際機関の本部があるベルギーの首都ブリュッセルだった。ベルギーの言語地域は主に三つに分かれて、北部がオランダ語の一種のフラマン語、南部がフランス語で、東部の一部がドイツ語の地域。分裂と合併を繰り返した国の歴史を反映している。

ブリュッセルはフランス語を話す地域が多く、私が住んでいた地域も同様。フランス語も赴任時は初心者だったが、当時は30代になったばかり。吸収力もあり、4年間の任期で、かなりのことは表現できるようになったという思いがある。

次が世界経済の中心地の米ニューヨーク、3カ所目はオーストラリア最大都市シドニーで、いずれも英語圏だった。バイリンガルではないため、英語で丁々発止のやり取りとはいかなかったが、仕事で使う分には問題はなかった。

ブラジル赴任が決まった時、一番の気掛かりは治安の悪さだった。それまでの赴任先は、先進国ばかり。特にシドニーは日本並みに治安が良く、夜中に道を歩いても事件に遭遇す

7年半に及ぶ製作期間の後半はサンパウロ市近郊に製作スタジオを構え、いざこれからという時にコロナ禍で突然のロックダウン。2週間足らずで全て解体し、スタッフがそれぞれリモートで仕事が続けられるように再構築した。その後は全てリモートで製作を続け、最後まで全員が集まって仕事することはなかったそう。

長い歴史とビジネスとして成熟した日本のアニメ業界と異なり、ブラジルはこの分野ではまだまだ成長の段階にある。短編映画は国際映画祭などで海外にもお披露目の機会が増えてきたものの、長編を製作できるアニメーターはブラジル国内で10人程度。ヴィヴィアーニ助監督も自身の長編アニメのプロジェクトを進めているという。優秀な人材が国内で活躍できる環境を整えたいと監督は話す。カマドドリジョアンのキャラを担当したサンドロ・クレウゾ氏はブラジル人だがイタリア在住だ。それでも、もともとヴィジュアルアーツには長けている国民性、原石だらけのブラジルのアニメ界は将来世界的に大ブレイクする可能性を秘めている。しばらくブラジルのアニメとこの二人からは目が離せない。

することはほとんどない。サンパウロ支局の前任者は車を盗まれたり、銃で脅されたりしたこともあった。赴任後は、外で歩きながら携帯電話を使わない、帰宅が遅くなればタクシーなどで車で移動するなどの助言に従っている。今のところ危ない目に遭っていない。

もう一つは「言葉の壁」だった。小生は大学でスペイン語を専攻した。サンパウロ支局がカバーする範囲はメキシコ以南の中南米・カリブ海だ。多くの国の公用語はスペイン語だが、実際に住むブラジルだけがポルトガル語となる。二つの言語は、日常的に使う単語では「ジニエイロ(お金)」などは似ているが、「サコーラ(袋)」など違うものも多い。スペイン語は慣れているので耳心地が良い一方、ポルトガル語は会話になると「リエゾン」も多く、聞き取りが難しい。

最近、面白いことがあった。佳子さまが11月にペルーを訪問した際、現地入りしたときのことで。ホテルの担当者と言葉を交わした際、私のスペイン語が「ポルトガル語なまり」だったと間接的に聞いた。スペイン語で「Yo(ジョ)」と言うべきところ、「Eu(エウ)」と言った程度だと思う。それでも、徐々にポルトガル語が染みついていくのかもしれない。残りの任期で、どれだけ「ポルトガル語化」が進むのか楽しみでもある。

アレ・アブレウ監督のアニメ最新作『ペルリンプスと秘密の森』

岸和田仁（『ブラジル特報』編集人）

6年ぶりに再会したアブレウ監督

前回お会いして40分以上もインタビューというよりもブラジル映画談義を交わしたのは2017年9月であったが、日本でも公開された前作『父を探して』でオタワ国際アニメフェスティバルのグランプリ、フランス・ヌメシエ国際アニメ映画祭最高賞、米アカデミー賞長編アニメ部門ノミネートとアニメ界から高い評価を得たアレ・アブレウ監督が最新作『ペルリンプスと秘密の森』の日本公開に先駆けて11月に来日した。11月14日、ブラジル大使館にて記者会見が設けられたので、当方も参加して6年ぶりに再会し、10分程度だったが親しく会話を交わすことができた。

前回のインタビュー内容は、弊誌2017年11月号に掲載されているが、インタビューの最後で、当方より、彼のルーツについて不躰な質問をしてしまったのだが、彼からフランクな回答（「確かに名前からいえばポルトガルだが、父方と母方を合わせてルーツをたどると、ポルトガル、イタリア、ドイツだけでなく、ブラジルの先住民インディオの血も入っているんだよ。まあ、その意味では典型的なブラジル人といえるかもね。」）をもらったのが印象に残っている。最新作にまつわるエピソードなども含め、今回の同監督との再会・会話を通じて得た情報を略述してみたい。

『ペルリンプスと秘密の森』というタイトルの由来

2017年に監督に訊いた時のタイトルは『魔法の森の旅人』で、大体のスケジュールは、2018年前半までに脚本を完成させ、2019年ないし2020年の公開を目指している、とのことであったが、コロナ禍もあって2023年の完成・公開となった。

ペルリンプスというタイトルになったのは、記者会見での説明では、「特に意味はなく、語感の響きがいいから、スタッフ会議のなかで生まれた」とのことであったが、どうやらポルトガル語のホタル（pirilampo）にヒントを得てひねり出された造語といえそうだ。



▲アブレウ監督（左）とヴィヴィアニ助監督（右）

『ペルリンプスと秘密の森』のあらすじ

子供の心からインスピレーションを得て、この極彩色の冒険ファンタジー物語が展開していくが、メインの登場人物（動物？）は、クマに似たブルーオとキツネに似たクラエ、それぞれ、自然環境を大切にす月の王国の秘密エージェント（ブルーオ）とテクノロジーを展開する太陽の王国の秘密エージェント（クラエ）であり、もともと全く違った文化をもち対立していた両王国だが、そんな二人が探し求めるのは森の救世主とされるペルリンプス。反発しあっていた二人（二匹？）は協力し合ってペルリンプスを探し求める旅にでるが、巨人＝環境破壊の現場に入り込む。そこにはサイレンが響き渡り、ダムが完成し、秘密の森は水没してしまう。ハッピーエンドでは全くない結末だが、子供の心が世界を変える、というメッセージが込められている。

パウ・ブラジル／先住民インディオ／もののけ姫

ブルーオとクラエが苦しい時や空腹の時、二人して果実を食べるシーンが出てくるが、この“想像の果実”はまちがいにブラジルという地名のルーツであるパウ・ブラジル（マメ科のブラジル蘇芳）のメタファーである。また、ペルリンプスは森の民としてアマゾン自然環境と共生してきた先住民インディオたちの「共生の知恵」のメタファーともいえるだろう。どちらもブラジルの自然環境を象徴化しており、ここに監督自身のルーツ（先住民の血も入っている）への潜在意識が関与しているのでは、というのは穿った見方だろうか。

さらには、監督の尊敬する宮崎駿監督作品群からの影響も読み取れる。最後の巨人と自然破壊を象徴するシーンに出てくるヘリコプターは、『となりのトトロ』に出てくるネコバスそっくりだし、監督に「環境破壊への批判的メッセージは、宮崎監督作品のなかでは『もののけ姫』で暗示していた森林破壊への批判と通底しているのでは？」と問いかけてみたら、「実は、その通りなんだ。記者会見ではいわなかったけれど、宮崎監督からの影響をすごく受けていることはご指摘の通りだ。前回は宮崎監督にお会いして親しく話すことができたし、今回は細田守監督にお会いした。日本の豊かなアニメから学ぶことは今後も続けたいと思っている。」というストレートな回答をいただいた。

というように、『ペルリンプスと秘密の森』にはブラジルや日本で積み重ねられてきた知恵が多層的に含み込まれているのだ。

（編集部註：今回のアブレウ監督来日時、通訳として活躍した服部章子さんにはP17に寄稿していただいた。）

新刊書紹介

◆◆◆◆◆ 新刊書紹介 ◆◆◆◆◆

『スタジアムの神と悪魔ーサッカー外伝』
（E・ガレアーノ著、飯島みどり訳）

世界中でロングセラーとなり邦訳もある『収奪された大地 ラテンアメリカ500年』や『火の記憶』（全3巻）などの作品で知られるウルグアイ人作家ガレアーノ（2015年没）によるサッカー・エッセイ集。「正史はサッカーを無視する」と考える著者によって書かれた「サッカーへのオマージュであり、その光を賛美し、その影の部分を告発する」百数十話が収められている。1998年みすず書房より刊行された同訳書の増補改訂版。

（本星社 2023年4月 344頁 3,700円＋税）

『アマゾンのふしぎな森へようこそ！』
（南研子著）

NPO 熱帯森林保護団体代表として30年以上にわたってアマゾンの先住民インディオの支援活動を続けて来た著者は、インディオ村に毎年数か月も

住み込み、彼らの自然環境も精神世界も共有してきている。無文字社会の彼らの若い世代は文字を学び始め、パソコンやスマホを使いこなす者も少なくない。そんな彼らによる消防団が森林火災から森を守っている。本書はジュニア向けだが、ブラジルの先住民インディオ社会の現状を再確認できる。

（合同出版 2023年9月 160頁 1,800円＋税）

『ブラジル日系人の日本社会への貢献』
（梅田邦夫著）

元ブラジル大使による本書は、ブラジル日系人の抱える問題やその歴史と現状を冷静かつ要約的に記述している。日本で活躍するブラジル日系人として、本書で取り上げられているのは、サッカーのセルジオ越後、浄土真宗大谷派門主の大谷暢裕、農産・教育事業家の斉藤俊男、弁護士の照屋エイジ、元外交官の関口ひとみ、といった方々。第2章では、アンジェロ・イシ教授による提言が掲載され、日系ブラジル人への対応の硬直性が問われている。

（東京図書出版 2023年10月 186頁 1,200円＋税）

『フレーヴォ、カボエイラ、パッソー
ブラジルペルナンブーコの民衆芸能』
（ヴァウデマールチオリヴェイラ著、神戸周訳）

「レシーフェにおいてカボエイラ術は、防御のための武術からフレーヴォの演奏に合わせて踊られるダンスであるパッソへと姿を変えた」ことを様々なエビデンスをもって明らかにした、フレーヴォ・カボエイラ・パッソに関する古典的名著の邦訳である。原著になりオリジナル図版も多数収録されており、ペルナンブーコにおける民衆芸能（今やユネスコの人類無形文化遺産）を文字・楽譜と写真・図版を通じて理解することが出来る。快著である。

（漢文社 2023年7月 248頁 3,900円＋税）

『ワタシたちはガイジンじゃない！』
（NHK「ワタシたちはガイジンじゃない」取材班編）

2021年2月11日放送された番組の書籍化。イッセイ尾形が演じた一人芝居の脚本（作者：宮藤官九郎）がプロローグとして掲載され、デカセギとして日本で働く日系ブラジル人の労働（第1章）、生活（第2章）、公衆電話（第3章）、リーマンショック（第4章）、困難を乗り越えて（第5章）について書き込まれている。放送番組本というよりもノンフィクション・ルポ。日本経済を支えている日系ブラジル人の精神的煩悶に思いを馳せるための入門書。

（春陽堂書店 2023年8月 192頁 税込1,980円）

!!「ブラジルあれこれ」!!

ブラジルの気温あれこれ：リオ(亜熱帯) vs. ベレン(熱帯)

昨年11月17日、リオで行われたTaylor Swiftのコンサートに参加していた大学生の女性が、熱中症とみられる症状で亡くなったとの報道があった。Taylor Swift直筆の悲しみにあふれる談話が発表され、次の日のコンサートは中止となった。主催者が会場への飲料水の持ち込みを禁止していたことや当日の体感気温が実に60℃近くに達していたことなどが女性の死亡の原因ではないかと報じられている。世界的な異常気象による熱波が、ブラジルにも押し寄せていることを示唆する報道が世界に向け発信された。

1976年から77年にかけてリオに約1年間住んだことがある。リオはとても暑いところという印象を持っている。最近の異常気象による気温上昇に加えて、今回は、コンサート会場という特殊な環境下の出来事で、体感気温が異常に上昇していた可能性がある。1970年代当時の生活実感としてリオがどれくらい暑かったか思い出してみる。真夏に街中の気温が41～42℃に達したことは何度もあった。ブラジルでは、街角いたところに気温計パネルが設置されており、毎日それを見ていたから間違いはない。また、アパートにエアコンがなかったので、暑さで寝苦しい夜もひと夏にかなりの頻度であった。

他方、2014年から17年にかけてパラ州ベレンに住んだ。着任前は、猛烈な暑さの中での生活を想像していたが、実際には、暑さは日中だけで、それも34℃止まりであった。オフィス出勤すれば、退出するまでは、エアコンをかけっぱなしにしていた。

ただ、帰宅後、夜には、涼しい風が吹き、気温が24℃を越えることはまれで、エアコンを使ったことはなかった。（帰国後、筆者は毎日BBCの放送を視聴しているが、30分ごとに放送される天気予報でも、地図上に示されるベレンの気温が34℃を超えたことはない。）

本誌11月号の「文化評論」の中で岸和田さんが紹介している西沢利栄先生は、ベレン滞在中の感想を、「スコール後のタクシーの窓から吹き込む熱帯を感じさせないさわやかな風」に言及しつつ「私は、『熱帯夜』という言葉は好きではありません。熱帯にはこのような夜が少ないのです。」（『アマゾンで地球環境を考える』岩波ジュニア新書）と書いている。

西沢先生といえば、アマゾンの環境を守ることが地球の環境を守ることであるとの強い信念に基づき、研究活動を続け、熱帯雨林の保護活動にも積極的にかかわっておられた。気候変動の影響による異常な高温やアマゾン地域の干ばつ、サンパウロやリオグランデ・ド・スール各州の豪雨による災害がブラジルで起きている今こそ、西沢先生はじめ先人の歩いてきた道をあらためて振り返る時だと思う。

さらに、2025年11月には、第30回国連気候変動枠組み条約締約国会議（COP30）がパラ州ベレンで開催される予定だ。世界中の専門家や政府関係者が、アマゾンに自分の目で見える機会を得ることの意味は大きいと思う。（MK）

水泳・競泳
HIROKO
MAKINO

マラソン
YUKI
KAWAUCHI

スキー・ジャンプ
RIKO
SAKURAI

CHALLENGE

パラ水泳
CHIKAKO
ONO

パラ陸上(やり投げ)
TAKUYA
SHIRAMASA

車いすバスケットボール
AMANE
YANAGIMOTO

車いすバスケットボール
KEI
AKITA

ワクワクするような挑戦を

あいおいニッセイ同和損害保険は、挑戦するアスリートとともに成長していきたいという想いのもと、
全社員が一丸となって、スポーツ支援を行っています。

立ちどまらない保険。

MS&AD あいおいニッセイ同和損保

CAFÉ
**FAZENDA
ALIANÇA**
SPECIALTY COFFEE
SINGLE ORIGIN



Encantando os paladares mais exigentes
O café produzido no município de São João da Boa Vista que fica na região centro-leste de São Paulo, pelo empresário Renato Ishikawa, é cuidadosamente elaborado a partir de grão 100% arábica, selecionado a cada lote e possui certificados internacionais de qualidade (Rain Forest Alliance e UTZ), e além disso, preocupado com a proteção ambiental, preserva 30% da mata virgem onde a exigência legal é de 20%.

コーヒーを愛する人への極上の一時
サン・ジョアン・ダ・ボア・ヴィスタ市（サンパウロ州の中央部）で、日系実業家石川レナト氏の農園で生産されたコーヒーは、ロットごとに選別された100%アラビカ豆から丁寧に作られており、厳しい国際的品質証明書（レインフォレスト・アライアンスとUTZ）を取得しています。さらに、環境保護法でコーヒー農園に課せられている20%の森林保全に対し、30%を保全し、環境にも配慮しています。

日本代理店
ミカド珈琲店 日本橋本店
ミカドコーヒー 日本橋室町三井タワー店
ミカドコーヒー 軽井沢旧道店
ミカドコーヒー 軽井沢 プリンスショッピングプラザ店
ミカドコーヒー 軽井沢ツルヤ店(スーパーツルヤ軽井沢店)
株式会社ミカド珈琲商会
サザコーヒー筑波大学アリアンサ店
オンラインストア<https://mikado-coffee.com>

住所
東京都中央区日本橋室町1-6-7
東京都中央区日本橋室町3-2-1, 日本橋室町三井タワー5階CAFE & BIZエリア
長野県北佐久郡軽井沢町大字軽井沢786-2
長野県北佐久郡軽井沢町軽井沢1178-798
長野県北佐久郡軽井沢町長倉2707
東京都港区三田2-21-8
茨城県つくば市天久保3丁目1

ブラジル赴任の前に ビジネスで使えるポルトガル語を



ブラジルでビジネスや生活をする上で
欠かせないのがポルトガル語です。
BrAsia(ブレイシア)では、
赴任前と赴任後の語学研修を提供します。
「講師任せにはしない」
現地に精通したスタッフが進捗を管理します。

BrAsia (ブレイシア) 運営: 株式会社 漢和塾 〒104-0061 東京都中央区銀座1-14-12 楠本第17ビル5階
TEL03-6263-0716
お問い合わせは E-mail: brasia@kanwajuku.com HP: <http://brasia-j.com/>

Churrascaria
Que Bom!
www.que-bom.com

Produzido pela
ATHLETA®

LOJA ASAKUSA
TEL: 03-5826-1538
TOKYO-TO TAITO-KU
NISHI ASAKUSA 2-15-13 Nikkoshi B1F

LOJA SHIMBASHI
TEL: 03-6402-5685
TOKYO-TO MINATO-KU
SHIMBASHI 4-1-1 SHINTORA CORE 2F



Leading You Forward

充実の体制で中南米に関する高品質なリーガルサービスを提供

中南米における豊富な駐在経験と現地事務所との密接なネットワーク

西村あさひ法律事務所は、世界18拠点で750名を超える国内外の弁護士が緊密に連携し、最高レベルのリーガルサービスをワンストップで提供する日本最大の国際的総合法律事務所です。ブラジル、メキシコ、アルゼンチンをはじめとする中南米各国での駐在経験がある弁護士を含む中南米プラクティスグループを設け、ノウハウや情報の蓄積に努めております。また、中南米の主要な国の多くの有力法律事務所との間で人材交流も含めた強固な関係を構築しているほか、Lex Mundi等の国際的な法律事務所ネットワークを活用し、中南米のほとんどの国において有力な現地法律事務所と関係を有しています。

東京およびニューヨークから有機的にサポート

西村あさひ法律事務所の東京事務所には、中南米の法務について豊富な経験を有する弁護士が多数在籍し、日本企業の皆様の中南米における事業展開をご支援しています。また、ニューヨーク事務所(Nishimura & Asahi NY LLP)においても中南米に駐在経験がある弁護士が常駐し、東京事務所とニューヨーク事務所の各弁護士が有機的に連携することで、日本と中南米の地理的な距離や時差のギャップを埋めつつクライアントの皆様に万全のサポートをご提供しています。

お問い合わせ

latinamerica@eml.nishimura.com

東京事務所 中南米担当: 清水誠、古梶順也
ニューヨーク事務所 中南米担当: 山口勝之、梅田賢

NISHIMURA & ASAHI

西村あさひ法律事務所の中南米プラクティスに関する弁護士等、主な案件実績、関連する論文/セミナー等については、以下よりご覧ください。



ブラジル



www.nishimura.com

Tokyo Nagoya Osaka Fukuoka Bangkok Beijing Shanghai Dubai Frankfurt Düsseldorf
Hanoi Ho Chi Minh City Jakarta*1 Kuala Lumpur*1 New York Singapore Taipei Yangon

*1 Associate office

360° business innovation.



世界の未来を、ブラジルとつくる。

[Business innovation-1]

鉄道と港湾を一体化させ、物流を効率化。

鉄道網と港湾ターミナルの複合一貫サービスを提供するVLI社に出資参画。
たとえばサントス北西のティブラム港で、取扱貨物を次々と拡大。

[Business innovation-2]

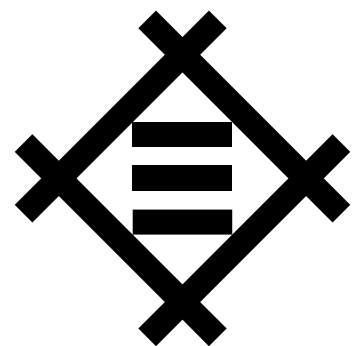
現場のニーズに細やかに応える農業事業で、農業の発展を。

オウロフィーノ社に出資参画。大規模な農地が多いブラジルで、
気候条件に適した農業製剤を開発。作物の順調な生育を農業で支え、増産や品質向上に貢献。

[Business innovation-3]

自動車リースで、社会をもっと便利に、もっと豊かに。

中南米最大の自動車市場ブラジルで、トヨタと共に B to B 向けリース事業“KINTO”を展開。
カスタマイズ自在のサービスで、社会全体の「保有」から「利用」という動きに応える。



世界の未来を、世界とつくる。三井物産

mitsui & co.